

《講演録》

モンゴルの思想史における聖書翻訳

芝山 豊

清泉女学院大学

Bible Translation and the Intellectual History in Mongolia

SHIBAYAMA Yutaka

Seisen Jogakuin College

《はじめに》

本日、イサク・シュミットによるモンゴル語訳聖書刊行 200 周年記念の国際シンポジウム「モンゴル語聖書翻訳と思想史」にご参集くださったみなさまの前でお話しする機会を得ましたことを、まことに光栄に存じます。

現代モンゴルの思想史とキリスト教に関心を抱いて研究に手を染めたのは、もう 30 年以上前のことです。当時の日本で、この領域に関心をもつモンゴル研究者は、ほとんど皆無といってよい状態でした。冷戦の只中で、モンゴルは鉄のカーテンの向こう側にありましたし、インターネットなどのない時代です。研究はとても困難で、諦めかけたころ、英語で *serendipity* 呼ぶような、幸運が重なりました。

まず、ウランバートルで開かれた国際モンゴリスト会議の折、チャールズ・ボーデン (Charles Bawden) 博士やゴンボジャブ・ハンギン (John Gombojab Hangin) 博士にお目にかかり、貴重なヒントをいただくことができました。

プロテスタント宣教者たちによるモンゴル語訳聖書に関わる論文

を書き終えた頃、次の幸運なめぐりあわせが訪れました。

モスタールト (Antoon Mostaert) 神父とも親交の深かったモンゴル研究者、磯野富士子先生とお話をして折、カトリック側の聖書の情報を探していることに触れると、磯野先生は「それなら、グロータス (Willem A. Grootaers) 神父を紹介してさしあげましょう」とおっしゃって下さったのです。グロータス神父は、日本方言地理学の権威で、スクートの名で知られる淳心会 C I C M のメンバーです。お手紙を書くと、すぐに、ベルギーにある資料をご紹介下さいました。

やがて、C I C M がモンゴルに神父を派遣するというニュースが届きました。記念すべき 1992 年に、カトリックの司祭として初めてモンゴル国入りしたカトリック宣教の先駆者たちと知己を得ることができました。その中には、大阪の金剛教会におられたグーセンス (R. Goessens) 神父や、現在のウランバートル教区司教、ウエンセスラオ・パディラ神父 (Bishop Wenceslao Padilla) がおられました。

それから、15 年後、本日は残念ながらご参加になれず、ペーパーでの参加となった内モンゴル大学のアルタンボラグ (阿拉坦宝力格) 博士をはじめ、内モンゴルの友人たちのおかげで、オルドスで、史上初、そして、いまもただお一人のモンゴル人司教、馬仲牧 Joseph Ma Zhongmu (Tegusbilig) 司教にお会いすることができたのです。そこでは、馬司教がミサで使うためにご自身で翻訳された旧約聖書のモンゴル語訳を見せていただくこともできました。

さらに年月を重ね、本日、ここに揃った、滝澤克彦博士、都馬バイカル博士、荒井幸康博士、(残念ながら、他用で出席できなかった) 岡洋樹博士らとの共同研究を核にして、本日、お集まりの皆さまとともに、研究の新たな局面に入ることができました。

素晴らしい方々との出会いには、きっと、「神」、あるいは、「ボルハン」の恩寵があったのだろうと、思わずにはられません。

本日、モンゴル宗教文化研究会、モンゴル聖書協会、アントン・

モスタート・モンゴル研究センター、モンゴル宗教学会の共催によりシンポジウムを開催するにあたり、これらの恩人と、有名、無名を問わず、これまでの歴史の中で、モンゴルとキリスト教のために尽くしてこられたすべての方々へ、衷心よりの感謝と敬意を捧げたいと思います。

さて、与えられた時間は少ないので、モンゴルにおける聖書翻訳研究の思想史的意義と間テクスト性の関わりについて、手短にお話して、若い世代の研究者の实り多き発表に席を譲りたいと思います。

《モンゴルにおける聖書翻訳研究の意義と目的》

ヨハネ・パウロ 2 世は「実際、一致の要素と多様性の要素の双方についての総合的検討だけが、人類のすべての文化の完全な真理を理解し、解釈することを可能にするのです。」と語っておられます。これはわたしたちの研究にも常にあてはまることだと思います。

例えば、1977 年にモンゴル人民共和国教育省が発行した 8 年生用の文学の教科書 Нийтийн Уран Зохиол 8 анги (БНМАУ Ардын Боловсролын Яамны Хэвлэл УБ., 1977) には、以下のような文章が載っています。

Айхыг мэдэхгүй өвчтөнүүд дундуур
Ариухан золбоотой явдаг сан
Амьд мэнд үлджээ, чи
Аврагч тэнгэр өршөөжээ, чамайг !

これは、ゲーテの「ファウスト」からの引用で、対応する原文のドイツ語は以下の通りです。

Auch damals Ihr, ein junger Mann, Ihr gingt in jedes Krankenhaus,

Gar manche Leiche trug man fort, Ihr aber kamt gesund heraus,
Bestandet manche harte Proben; Dem Helfer half der Helfer
droben.

冷戦真只中、モンゴル人民共和国では、聖書の配布が犯罪であった時代にも、ダンテやゲーテ、あるいはドストエフスキーをモンゴル語で語るためには、キリスト教用語の訳語はやはり必要でした。

このテキストでは、**Dem Helfer** に **Аврагч тэнгэр** を当てていますが、逐語訳の「救い手」**Аврагч** に付加された **тэнгэр** にはどのような意図があったのでしょうか？それは、いかなる翻訳戦略で選ばれ、翻訳者が **тэнгэр** に込めた意図は、当時の読者にどのように理解されていたのでしょうか？

この問いに答えることは、簡単なことではありません。

キリスト教は、モンゴル人社会の中で、断続的に受容と拒絶の過程を繰り返しながら、1000年に亘り、モンゴルの精神史の一部を形成してきたからです。

それは、1007年のケレイトのネストリウス派への改宗に始まり、モンゴル帝国成立期のローマカトリックとの接触、元明代の布教拡大、清代の禁教の時期を経て、19世紀以降の世界的な植民地主義を背景とする宣教の活発化、義和団事件、社会主義国の誕生、スターリニズムや文化大革命等の苦難の中を潜り抜け、福音宣教の新たな時代に入っています。

東北アジアの思想史や文化交流史を考える上で、モンゴルのキリスト教史は極めて重要な意義をもっており、アジアの近代化過程の比較研究にも、極めて重要です。しかし、残念ながら、幾つかの優れた先行研究があるとはいえ、モンゴルのキリスト教史は、政治区分や時代区分、あるいは教派によって切断され、ひとつの大きな流れとしては叙述されてきませんでした。仏教やシャマニズムの研究と比べても、モンゴルのキリスト教思想に関する研究はまだまだ不足しています。

わたしたちの研究の狙いは、こうした欠陥を補うべく、南北モンゴル、ブリヤート、カルムイク等のモンゴル諸族についての現地調査、資料情報収集とデータベース化によって、モンゴルにおけるキリスト教宣教史と聖書翻訳の過去と現在を鳥瞰し、各時代、各地域の個別の問題と普遍的な問題の両面を、学際的アプローチから総合的に研究し、モンゴルの精神史の文脈に、適切に位置付けることにあります。

《スコポス (skopos) と間テキスト性 (intertextuality) 》

モンゴル諸語に翻訳された聖書には、分冊や復刻などを含めて、優に 100 種を超えるバージョンがありますが、それらの完全なカタログはまだできていません。また、それらの翻訳が、どこで、誰によって、どのような活動の中で生まれてきたものか、それぞれの版がいかなる影響関係にあり、どのような経緯によって出版されてきたかということについても、十分詳らかにされていません。

遅くとも、ウィクリフの聖書が世に出る 70 年以上前に、聖書はモンゴル語に翻訳されていました。つまり、モンゴル語訳聖書は東アジアでは唐朝期の漢語訳について、最も古いもののひとつです。しかし、1305 年頃に完成していたと思われるモンテ・コルヴィーノの訳になる新約聖書と詩編のテキストは現存していません。

いま、完全な形で手にとることのできるモンゴル語訳刊行聖書は、200 年前のシュミットのカルムイク語訳が最古のものです。

シュミットの聖書の登場までのおよそ 500 年の間に、他のモンゴル語聖書が全く存在しなかったか否か、いまのところ、断言はできません。

モスタールト神父が報告したエルクート Erkut の事例のように、かつて、也里可温と呼ばれたモンゴルのキリスト教徒たちが、キリスト教の概念をなんらかの形で継承していたり、日本の隠れキリシタンのように、典礼や聖書のテキストを守りぬいた人々がいたりしたかもしれません。

日本について言えば、1552年には、日本語による四福音書の翻訳が完成していましたが、その聖書の完全版は現存していません。しかし、その概要は、聖書以外のキリスト教宗教書の中に見ることができます。そこで使われている訳語は19世紀以降の日本語聖書の訳語とは大きく違っているのです。

日本語とモンゴル語の聖書翻訳の比較で最も興味深いのは、英語で God に当たる神の訳語選択の問題です。

日本にやってきたイエズス会宣教師は、来日直後、神に対して「大日」のような仏教用語を積極的に使っていましたが、間もなく、仏教との混同を排除するために、ラテン語（ポルトガル語を経た形での）デウス Deus を用いることになりました。

これは、原語主義に基づくというより、ヨーロッパから来た修道士たちが、文化翻訳に必要な言語的蓄積、とりわけ漢籍の古典的素養を持ち合わせなかったためだと説明することもできます。また、ラテン語を習得し、漢籍にも精通した日本人インフォーマントたちも含め、キリスト教の新しさは古典漢籍の中からの翻案や造語ではなく、新奇な外国語の方が魅力的であり、時代の雰囲気を反映したものだとの思いがあったのかもしれませんが。

しかし、250年に及ぶ過酷なキリスト教禁教の時代を経て、日本語訳聖書は19世紀の漢文訳聖書、神天聖書の影響の下で、漢字を使った「神」という訳語を定着させることになりました。

モンゴル語訳聖書の神の訳語は、19世紀、Edward Stallybrass と William Swan による翻訳の中で、仏教聖典の翻訳で仏の訳語として定着していた「ボルハン」がすべての文脈で採用された後、その改訂を目指した委員会訳まで継承され、現在、各教派で使われているモンゴル語聖書の中でも採用されています。

19世紀、Edward Stallybrass William Swan らによって本格的に始まった縦書きのモンゴル語による個人訳聖書は、1950年代に大きく変わりました。1954年の *The Bible Translator* 掲載の A. W. Marthinson による *The Revision of the Mongolian New Testament* と

いう記事によれば、改訂は 1935 年に決定され、まず中国語から中国語に熟達したモンゴル人がモンゴル語の草稿を起し、また Joel Eriksson, Gerda Ollen などの監修をうけ、戦争による中断期間のうち、1951 年、モンゴル人 3 名、外国宣教師 4 名による委員会が校閲したうえ 1953 年に完成したとされています。

勿論、この時点では、エキュメニカルな聖書翻訳はまだ成立していません。漢語世界において、天主教（カトリック）と基督教（プロテスタント）は弁別されるべきものでしたし、プロテスタント宣教師にとって、内モンゴルの漢人とモンゴル人が共存する地域のカトリック教会の用語の流用は立場上、認め難かったでしょう。いずれにせよ、19 世紀から 20 世紀のモンゴル語訳聖書では、漢字世界の「上帝」、「天主」、「神天」に対応するモンゴル語の訳語も採用せず、ブッダの訳語としても日常的に頻繁に使われている「ボルハン」を使い続けたのです。

しかし、この用語は、1990 年以降の新生モンゴルで、新たな TERM QUESTION を生むことになりました。

現在、モンゴル語の神の訳語としては、《Ертөнцийн Эзэн》《Бурхан》《Тэнгэрийн Эзэн》《Тэнгэрбурхан》等の訳語が存在します。

我々の研究にとって重要なのは、どの版の訳語が最も適切かということではなく、それぞれの翻訳者が、既存のテキストをどう評価し、モンゴルに根付いてきたキリスト教以外の宗教や儀礼をどのように理解して、それらとの関係において、如何なる基準と戦略にしたがって、訳語を選択し、翻訳を進めたのかということ、またそれらの翻訳がモンゴル人社会にどのように受容されたかということです。

イエズス会が清国布教にあたり、中国人読書人階級を中心に布教を展開したのに対して、Stallybrass たち LMS はモンゴルの庶民への布教を念頭においていました。それでもなお、SS 版のモンゴル

語聖書には、極めて高級な語彙が用いられていると改訂者は指摘しています。

これらの翻訳姿勢は、今日の聖書翻訳で重視されるスコ-pos理論 (skopos theory) から見直すことができるでしょう。「スコ-pos」というのは、目的、役割を意味しています。

Stallybrass にとって、聖書がもつ威厳と格調をモンゴル人に示すことが翻訳の目的の一部だったのです。実際、現在、知識人が文学作品として聖書を読む場合、文語訳の文体が好まれる傾向は、モンゴル人の間にもあるようです。

以下の表は、現代のモンゴル国で用いられているカトリック教会のカテキズムと 20 世紀のモンゴル語聖書 2 種を対比したものです。

A	B	C
Жаргалангийн номлол (Мамай 5:3-5) 2013	Мамай 5:3-5	Ματθαῖος 5:3-5
Жаргалантай яа, ядуу даржин сүнсээр амьдарч буй хүмүүс жаргалтай яа! Учир нь тэнгэрийн хаанчлал тэднийх юм.	Сүнсэн дотроо ядуу хүмүүс ерөөлтэй ээ! Учир нь тэнгэрийн хаанчлал бол тэднийх юм.	Бурхнаас өөр түшиж чадахгүй хүмүүс заяатай юм. Тэд Бурхны улсыг залгамжлах болно.
Жаргалантай яа, гашуудаж буй хүмүүс жаргалтай яа! Учир нь тэднийг тайтгаруулж болох юм.	Гашуудаж буй хүмүүс ерөөлтэй ээ! Учир нь тэд тайвшрал авах болно.	Гашуудаж байгаа хүмүүс заяатвй юм. Бурхан тэднийг тайтгаруулж өгнө

<p>Жаргалантай яа, дөлгөөн зантай хүмүүс жаргалтай яа! Учир нь газар дэлхий тэдний өв хөрөнгө болох юм.</p>	<p>Дөлгөөн хүмүүс ерөөлтэй ээ! Учир нь тэд дэлхийг өвлөн авах болно.</p>	<p>Тэсвэрлэгчид заяатай юм. Бурхан тэдэнд амласан газраа өгнө.</p>
---	--	--

これら3種類のテキストには、それぞれのスコポスの違いがよく見えています。

テキストAは、カトリック教会で信仰の本質を示す「真福八端」(Beatitudes/ Жаргалангийн номлол) と呼ばれるものです。ラテン語の形式を移植し、南モンゴルのカトリック教会のミサの中で唱えられてきた伝統にも沿いながら、頭韻を踏んだ韻文としての訳文となっています。

同じ聖書の箇所であるテキストBとCのスコポスの差は、3節の「心の貧しいもの」ギリシャ語原文 $\pi\tau\omega\chi\omicron\iota\tau\tilde{\omega}$ $\pi\nu\varepsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha\tau\iota$, the poor in spirit の翻訳に明確にあらわれています。

テキストBの **Сүнсэн дотроо ядуу хүмүүс** は source-language oriented な翻訳、テキストCの **Бурхнаас өөр түшиж чадахгүй хүмүүс** は target culture oriented な側面が顕在化した翻訳と言えるでしょう。

マタイ 5-3 は、日本人の間では、特に理解しにくいと言われていいます。日本の文学にも大きな影響を与えたとされる日本語文語訳聖書の訳は「こころ貧しき者」となっていますが、日本語には、「こころ少なし」、「こころ狭し」といった慣用句があり、それらからの連想で、「こころ貧しき」が「狭量な」とか「利己主義の」とかいった意味で理解されてしまう可能性が高く、文全体の意味がつかみにくいのです。物質的に貧しいということの強意表現にとるか、ギリシャ語のテキストを旧約聖書のヘブライ語の用語と照らし

合わせて、さらに解釈を加えて、「だからこそ神により頼む」と解釈するのか、学者や聖職者の間でも意見が分かれることになります。

テキストCの訳文は、翻訳者の独断によるものではありません。例えば、子どもや第二言語使用者に分かりやすいことを意図した Contemporary English Version (CEV)の英文にも類例が見られます。宣教の実態に即して、スコポスを設定して、逐語訳から起こる誤解を避けることに、高い優先順位を置いているのです。

異なるスコポスから見れば、テキストCの訳では、間テキスト性が失われる懸念があります。ルカ福音書の $\tau\hat{\omega}\ \pi\nu\epsilon\acute{\upsilon}\mu\alpha\tau\iota$ のない、単なる「貧しさ」との関係性が正確にわかりにくくなりますし、多くの言語における逐語訳の聖書の引用を含む様々なテキストとの関係性が閉ざされてしまうからです。

今日、モンゴル語聖書翻訳でも、United Bible Societies と SIL International が提供する Windows と Linux 上で動作する翻訳・出版ソフト Paratext の利用が可能になっています。そうした環境の下で、翻訳が、最新の聖書学の成果に根ざして、誠実に行われている限り、どちらの訳がより優れているかという議論は無意味でしょう。むしろ、問われるべきは、それぞれのスコポスに沿った、receptor language としてのモンゴル語のコーパス corpus の質のように思われます。

ブリヤート語やカルムイク語は言うまでもなく、モンゴル国のモンゴル語と内モンゴルのモンゴル語でも、言語史だけでなく、思想史上のコンテキストも大きく異なります。各モンゴル語が文語として共通部分を核にして、作りあげてきた、より大きな全体を含む質の高いコーパスが求められます。

そのためには、例えば、シャマニズム、仏教、儒教など用語の検討に留まらず、モンゴルの近代化過程の中で、エロスやアガペのよう概念が、いつ、いかなる用語でモンゴル語の中に登場して、どのように受容され、対応する言葉がどのように変容してきたのか、ダ

ンザンラブジャーの宗教詩から今日のポップ音楽のラブソングまで、丹念に見ていくような研究が重要になってくるのではないのでしょうか。

翻訳の実践者だけではなく、文学、歴史学、言語学、宗教学等の多く学問領域での学際的な関与が不可欠です。

本日のシンポジウムを契機に、より多くの研究者が、個々の研究の枠を超えて、近接する共通の課題について、意見を交換し、多くの叡智によって、モンゴルにおけるキリスト教と思想史に関する研究が深化していくことを祈念して、私の拙い話を終えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

注記：本テキストは、去る 2015 年 9 月 4 日にモンゴル国ウランバートル、モンゴル日本センターに於いて開催された、《イサク・シュミットによるモンゴル語訳聖書刊行 200 周年記念国際シンポジウム「モンゴル語聖書翻訳と思想史」》（モンゴル宗教文化研究会、モンゴル聖書協会、A. モスタールト・モンゴル研究センター、モンゴル宗教学会共催）での英語によるキーノート・スピーチの日本語版である。但し、当日の配布の英語、モンゴル語のテキストと全く等価なものではないことをお断りしておく。